



再思「先住民？」—— 愛伊努族的名稱

「先住民」再考—アイヌ族の名称

Rethinking the Term, "Sienjumin": The Name of Ainu

林江義 行政院原住民族委員會 主任秘書

尾原仁美 翻譯

20年前，在台灣省政府服務期間，曾獲甄選赴日做專題研究。在東京進修期間，學校曾詢問我有無意願到北海道long stay以體驗北國農莊生活。當時因早有訪視行程乃不克前往。回國後，一直深覺惋惜。幾年後時移勢異，2005年8月，再次有機會獲北海道Utari協會邀請參加在道央平取町「二風谷」，所召開的國際會議，此行可謂得嘗夙願，彌補了多年未能一窺北海道遼闊大地、壯麗美景的遺憾。

本次會議的主題係探討國際少數民族的基本人權，我個人獲邀是希望會中能代表台灣政府，針對我國甫經立法院通過總統公布施行的「原住民族基本法」做專題報告。以往出國參加國際會議，是以取經為主甚少有上台報告的機會。唯此次意外在國外報告國內重要法案之立法歷程與主要內涵，是一個既新鮮又興奮的經驗，加上好友潘紀揚君鼎力相

20年前台灣省政府に勤めていた頃、日本での研究の推薦を受けたことがある。東京で勉強している時、北海道にロングステイして北国の農村生活を体験してみないかと学校に聞かれたが、当時はすでに他の視察の予定が組まれており、行くことは適わなかった。帰国した後も、そのことをずっと残念だと思っていた。それから数年後の2005年8月、北海道アイヌ協会から道央平取町「二風谷」で開催される国際会議へ招待される機会があり、ようやく願いがかなって、北海道の広々とした大地の、壮麗な美景を見ることができなかつた長年の遺憾を解消することができたのだった。

その会議のテーマは世界の少数民族の基本的人権で、私が招待されたのは、台湾政府を代表し、立法院で可決され総統により公布施行された「原住民族基本法」について報告することを期待されていたためであった。普段、国外に出て国際会議に参加する際、どちらかと言うと知識の吸収が主で、報告する機会は少ない。意外にも、国内の重要法案立法の経緯と主要内容を国外で報告できることになり、それは新鮮で興奮する経験であった。友人潘紀揚君の助けを借り、発表の前日、徹夜で講演稿の

再思「先住民？」— 愛伊努族的名稱

助，前一晚連夜將講稿完成英文譯本，使次日研討會專題報告得以圓滿順利。

在三天的會議中，我們幾位台灣原住民族的代表，始終對於北海道愛伊努民族自稱為「先住民」大惑不解。根據北海道發展的歷史，在日本本州的大和民族入侵北海道之前，愛伊努民族就「原住」於此，並且創立了獨自的文化，而愛伊努文化據說是以在此之前的擦文文化為主體，同時受到本州和東北亞地區的影響而建立的。從12世紀末左右開始，大和民族集團式地渡海來到北海道南部，遂演變成外來民族與原住民族對立衝突的局面，最終仍被強勢的外來民族所統一。這一幕民族大遷徙的歷史與競逐，相較台灣原住民在17世紀，面對大陸渡台先民競相渡海來台時所遭到的悲苦命運幾乎如出一轍。唯一不同的是，當台灣原住民族被次第據台殖民政府稱為「番」、「高砂族」或「山胞」時，清楚瞭解到這是一個外來民族充滿歧視、貶抑、侮辱所賦予原住民族的稱呼。也激起台灣原住民族在20世紀末發動了長達10年大規模的正名運動，甚至原住民菁英有人為此入獄服刑，最終於1994年才一舉掃除「山胞」，正名為「原住民」——一個原住民族共同打拚爭取的名字。在異國再次面對被稱為「先住民」的愛伊努族，彷彿回時光隧道，見到一個力主單一民族的組合才能打造世上最優秀的國家，把當地原住民族硬是直呼

英語版を完成させ、日本でのシンポジウムのテーマ報告を円満に行うことができた。

三日間の会議中、我々台湾原住民族の代表者は、北海道アイヌ民族が「先住民」と自称していることにずっと疑問を感じていた。北海道発展の歴史では、本州の大和民族が北海道に侵入する以前から、アイヌ民族はそこに「原住」しており、独自の文化を創っていた。アイヌ文化は擦文文化を主体とし、本州と東北アジア地域の影響を受けてできたという。12世紀末頃より、大和民族は集団で北海道南部に渡ってきて、外来民族と原住民族間の衝突という局面に至り、ついには優勢であった外来民族によって統一された。この民族大移動の歴史と競合は、17世紀に台湾原住民と大陸から渡台した漢人との間に起きた命運とほとんど轍を同じくする。唯一異なるのは、台湾原住民が次第に殖民政府によって「番」、「高砂族」、「山胞」と呼ばれるようになったとき、そこには明らかに外来民族の原住民族に対する差別、蔑視、侮辱が込められていた。そのことは20世紀末の台湾原住民族が発動した、10年にわたる大規模な正名運動につながり、そのために投獄された原住民族エリートまで出ることとなった。1994年にはついに「山胞」を一掃し、「原住民」という正式な名称を、原住民族は共に勝ち取ることができたのである。しかし、異国で「先住民」と称されるアイヌ族に再び向き合ったとき、まるでタイムトンネルを遡るような気持ちになった。単一民族を極力主張することで成し遂げられた世界で最も優秀な国家が、当地の原住民族を「先住民」と呼んでいる荒唐無稽と傲慢。アイヌ族の人たちはこの呼称に対し、運命だから仕方ないというような表情は、かつての台湾原住民と酷似している。今後、北海道の「原住民族」の名称を勝ち取るとは、長い長い血と涙が混じる苦闘の道のりとなることだろう。